

あしがきのあしがき ~著者から人事担当者へのメッセージ

『組織を芯からアジャイルにする』



2022年7月刊
発行：ピー・エヌ・エヌ
販売：2,750円

主な内容

- 組織が挑むDXの本質とは何か
- 日本の組織を縛り続ける「最適化」という呪縛
- アジャイルを組織運営や業務に適用する
- 自分の手元からアジャイルを始める
- 最適化組織と探索適応組織
- 組織の中でアジャイルを広げる
- 組織の芯からアジャイルを宿す26の作戦

デジタルトランス・フォーメーション（DX）の名の下に組織変革を掲げ、乗り出していく企業が増えています。大企業はもちろんのこと、中堅企業や地方の企業に至るまで。日本中の組織が程度の差はあれ、一様に取り組もうとする様はかつてない潮流といえます。しかし、皆さんもご存知の通り組織変革を必要とする動きは今に始まったことではありません。

DXの本質は 組織変革に他ならない

むしろ、10年、20年、さらにそれ以前から、企業組織に変革をもたらすための処方箋が様々と提案されてきています。驚いたことに、組織が抱える課題はこの数十年で何一つ変わっていません。現に、20年前に発刊された書籍を開いてみても、その課題の共通性に驚きさえ感じます。「組織が縦割りで意思疎通ができない、遅い」

「意思決定が曖昧で物事が進まない」「効率性重視でそのほかの選択肢がない」など、現在に通じる問題意識がそこにはあります。数十年前の教えや提案が現代に至るまで変わらず有用と感じる。その状況の深刻さにまず私たちは目を向ける必要があるでしょう。

組織を「動ける体」にする

組織変革のための処方箋、つまり解決策はすでに存在する。それにもかかわらず、なぜ組織は変わらないのでしょうか。それは組織が解決策を活用できる「動ける体」になっていないためです。いくらたくさんの解決策を手にしたところで、適切なタイミングで実行に移さなければ機能しません。そして、1度や2度試行したところですぐに効果が出るはずもなく、繰り返し実験的に取り組む必要があります。

こうした状況観察と意思決定、



株式会社レッドジャーニー
代表 市谷 聡啓

そして実行を反復的に行える動作を身につけること。それが「組織が動ける体になる」ということであり、そのためのヒントが実はソフトウェア開発にあります。

組織運営や業務に 「アジャイル」を適用する

ソフトウェア開発の世界では一足先に「動ける体」になるためのすべとして「アジャイル」という考え方と方法を手にしてきました。ソフトウェア作りこそ、機敏な状況判断と実行、そしてその結果からより適した意思決定を行う、という動きが求められます。ソフトウェア開発がそれこそ20年かけて育ててきた「アジャイル」を今度は開発以外の業務や組織運営に適用する。これが本書『組織を芯からアジャイルにする』に込めたメッセージです。

皆さんもOKR、1 on 1、パーパスマネジメント…数多くの手段をすでに手にされているはずで、次に必要なのはさらに新たな方法ではなく、組織を動ける体にするための取り組みではないでしょうか。